
FB-フィフス・バタフライ-

王生らてい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FBーフィフス・バタフライー

【Nコード】

N6951T

【作者名】

王生らてい

【あらすじ】

度重なる争いの果て、資源は枯渇し、宇宙へと手を伸ばすことすらままならなくなった人類。わずかな資源をめぐって争うも、その争いのために資源を消費する――確実に、滅びへと近づく人類。その半面で、エネルギーの節制が実り、地球は自然が非常に豊かな星へとなっていた。これは、そんな皮肉だらけの世界でも自由気ままに生きる、「Xー2」と呼ばれる兵器を駆る少年・少女の物語。

Sky. 1 「飛翔するアゲハ」

かんかんと、降り注ぐ太陽の光。

空は冴えわたるような青に染まり、雲の白さが異様に目立つ。それでいて、この森林の中では、隙間から入り込む日光が程良く眩しさを軽減させて、さらに緑色の葉を濃く、美しく輝かす。そこかしこに生きる花々は各々の色を発現させ、自らを文字通り咲かせている。

そんな、広大な大自然の中で――

「ふう……」

深く、深く呼吸をする人影があった。

その女は、背中にかかる程度の黒い髪をしていて、青を基調としたワンピース調の服に身を包み、小高い丘のようなどころから大自然に囲まれながら、その大自然を見下ろしていた。

「やっぱり、ここの空気はいつでも綺麗だ。僕の栄養の8割は、ここで摂取してるんじゃないかな」

1人でそんな事を言いながら満足げにほほ笑み、彼女は右手をそっ、とその大自然に伸べた。まるで、小さな子供の頬を撫でてやるような仕草で、その掌を青空へ向け、白い指で木々をなぞる。

ぱたぱた、という音。

それは、たとえこの場に他の人間がいたとしても、彼女以外には聞こえることはないだろう。

真っ黒な翅に、赤、青、緑などの微妙な色彩をきらめかせる――その美しい虫の名は、アゲハ、という。

アゲハはその美しい翅をはばたかせながら、女の指に音もなく止まった。

彼女はそれを静かに、静かに自らの顔に引き寄せ、その翅に優しく語りかける。

「いつ見ても、綺麗だよねえ、キミは」

まるで毎日会っているかのような、そんなフレンドリーな語りかけ。対するアゲハはその言葉の意味を理解してか知らずか、ぱたぱたと飛び立たないよう、ゆっくりと翅を揺らめかせた。

それを見て、彼女はふふっ、と笑みをこぼし、その翅に一瞬だけ、薄い色の唇を触れさせた。口についた黒い粉を指で拭い、唇から指へと場所を移動した粉に対して、

「綺麗だ」

とだけ。

はあっ、と右手を空中にかざし、とたんにアゲハは飛び立つ。

そんな様子すら、彼女にとってはいつも通りだった。

さて。

あなたは信じるだろうか？

この世が今、戦乱の真っ只中に瀕していると。

あなたは信じるだろうか？

こんな大自然を生かす大地が、既に枯れ果てていると。

あなたは信じるだろうか？

こんな腐りきった世界でも——人類は、未だ地球から出られずに、縛られ続けていると。

「おい、アマネ」

とたんに背後からかけられた声。女……いや、少女、と形容した方が適切だろう。その少女と同じ年くらいいの、若い男の声がした。その声に、アマネ、と呼ばれた少女は振り向かずには答える。

「なんだい？」

「整備が終わったってよ。お前の機体」

「それだけかい？」

余裕すら含んだ言葉。

「そんな事を言うためだけに、私のこの時間に割り込んでくるのか

な？ 随分だね」

「……幼馴染ながら、よくわからん奴だよなあ」

男は呆れたようにそう呟くと、その調子のまま言葉を続ける。

「大体、あんなの見つけて何がしたいんだ？ 俺たちで戦争でも終わらせたいのか？」

「本気でそんな面倒な事を考えているのかい？ だったら僕は驚くよ」

嘲るような声を孕ませ、アマネは続けた。

「僕はただ——この広大な自然を、守りたいんだ。もっと言うなら、世界中の自然を見てみたい、というのもあるかな」

大きく手を広げ、アマネは言う。さながら、十字架に召される神のように、何かを信じるような声で。

「だから、僕は戦争なんかに興味はない。ただ、興味のない事のせいで死んだりするのはまっぴらごめんなんだよ」

「……なんだろうなあ」

男の方はアマネに歩み寄り、その隣に並んで大自然を見下ろす。

「確かに、良い眺めだが……皮肉だよな。これが、戦争の跋扈する今の、わずかな副産物だ」

「そうだね。だからこそ、美しい」

なんだか全く理屈の通っていない事を言いながら、アマネはくり、と振り返って歩きだす。

男の方がそれに、台詞の割に興味のなさそうな声で尋ねる」

「どこ行くんだ？」

「降りておくよ。ヴァル、君はもっとそこで空気を満喫するといい。栄養食だけじゃあ、飽きるだろう？」

口元には、歪にも見える笑みを浮かべて。

「整備された機体とやら、楽しみにしておくよ」

第3国家、日本国。

それが、この国の正式な名称だ。世界50の国の中でも、3番目に先進しているとされるこの国には、国土の6割を占める広大な大自然がある。人口4000万に対して、いささか広すぎるだろう、と思えるほどに。

そんな国に、アマネ・クライスクラスは暮らしていた。

円筒型のエレベータで、地下へと降下していく。無機質な蛍光灯だけが灯る暗い通路に目を向け、アマネは静かに考える。

――さて、どうなったかな。僕の機体の調子は。

この間は派手にクラッシュしてしまったな。奇跡的に無傷だったが――そんな事を考えられるほどに、アマネは暇を持て余して、それでいて余裕を持っていた。

軽く重力がのしかかる感覚を感じた直後、エレベータの扉が開く。そこには地下とは思えないほどに広大な空間が広がり、地面の中にいるという窮屈さを全く感じさせない。

そんな空間に身を降ろし、アマネは歩きだした。

――ああ、やはり地下では空気が悪い。

――私にとって、こういった空間に長くいるのは、良くないな。軽く不機嫌になりながら、アマネはすすと、と無人の空間で歩を進める。目指すはこの広大な空間の、更に奥の奥。

ふと、ぐく……と音がした。

アマネはそれにも全く動じずに、歩き続けた。音が自分の腹のあたりから鳴っていると知っていたからだ。

――ああ、そういえば今日は朝から外に出ていたから、何も食べていないな。部屋に戻ったら、何か摂らないと。

悠長にそんな事を考えていると、

ドオン！！ という轟音。

やや遅れて、ズズン……ッ！！ と、地響きの音が聞こえた。

アマネはそんな様子に上を見て、少しだけ考え込んだ後に走り出した。

「……元気いっぱい結構なことだねえ、軍の連中は」

そう呟きつつ、自分の機体が格納されているハッチへと向かう。

どごん、どおん！ 轟音はやむ気配がない。恐らく他国の連中が牽制攻撃でもしかけているんだろう、アマネはそう考えて、

「僕たちが出て行くまでもないかな？」

立ち止まって、そう呟いた。すると、

「そーいうわけには、いかんだろ」

と、背後からさっきの声が聞こえた。アマネと話をしていた、若い男の声だ。

「ヴァル、君も戻ってたのかい？」

「あんな状況で風景を眺めてるなんて俺には出来ねえよ。今度コツでも教えてくれ」

「いいだろう。だけど、まずは……」

この状況を片付けないと。

2人同時にそう思った瞬間に、再びどがああああああ！！と

より一層激しい音がした。

水素爆弾

「あーあー、きっとH D Gでも使ってるのかな？」

「もったいないよな。石油の採掘に使った方が、よっぽど有意義だろうに」

半笑いで、ヴァルと愛称で呼ばれた男は呟いたが、すぐさま真剣な表情に切り替わり、

「とりあえず急ごう」

アマネにそう促した。アマネも特に断る理由はなく、そのまま2人は走り出した。

「おお……きれいに修復されてるね。称賛に値する」

ハッチに着いたアマネは、つい先日大破させてしまった自分の機体を眺め、そう言った。

イクセリア

「『IXELIA』——『X-2』シリーズでも数少ない、『完全

な人の形』をした機体、か」

同時にハッチにたどり着いたヴァルも、アマネの機体を見上げてそう呟く。

「やっぱり、凄えよなあ」

「何がだい、ヴァル？」

「威圧感がさ」

2人の目の前には、全長5メートル程度の人型をした、金属質のそれがハッチに固定されていた。

黒に白、赤、黄の3色を装飾に用いたボディ、Vの字をかたどった何かの下に、鋭い瞳がほんの僅かにのぞく頭部、2つのウェポンラックを剣道の竹刀をそうするようにぶら下げた両肩、そして、明らかに何かを乗り込ませるために空洞が作られている胸部。

X-2シリーズ。

かつて、第4次世界大戦と呼ばれる、世界を巻き込んだ戦争があった。

多くの人を殺し、国土を焼き、果てには地球の資源の殆んどを使いきるという、まさしく人類を破滅へ導く第一歩となった戦い。その中で、日本軍が極秘裏に開発していた、『半・人型兵器』。

アマネ・クライスクラスの乗り込む『IXELIA』は、全機体でも1割程度しかないといわれる『五体人型』と呼ばれる、完全な人型をした戦闘兵器だ。

「さて。整備後の性能、見せてもらおうかな」

アマネはそう言うと、機体の横の部分に取り付けられたタラップをかんこん、と冷たい音を響かせながら登ってゆく。

「今度はミスるなよー？」

ヴァルは何気なしにそう言って、くるりと背を向けた。自分の機体に、乗り込むためだ。

アマネはより一層、気を引き締めた。

ヴァルの言う通り、今度は操縦のミスをするわけにはいかない。

一歩間違えれば、死が待っている世界だ。うかつな判断は、命取りだ。

アマネはタラップの最上段から、胸部で開きっぱなしの空洞部分に乗り込んだ。もちろん、ここは操縦席だ。

と言っても、複雑なレバーなどは何一つない。ただ真っ暗な、直線のない空間に囲まれた、そんなところだ。

「さあ、行こうか『IXELIA』」

アマネがそう呟くとともに――――

ふわり、と。アマネの体が、宙に浮かぶ。

同時に、アマネの周囲が、オレンジ色に淡く輝き始めた。何もかもを暖かく包み込むような色に囲まれたアマネは、自然と心地よい気分になる。

そして、アマネはふう、と大きく息を吐き、

「―――出撃しよう」

短く呟くと同時に、その兵器は、起動する。

黒い身体を動かして、ゆっくり、ゆっくりと。まるで、空へ飛び立たんとする、アゲハのように。

『IXELIA』直上の天井がガッ！ と勢い良く開き、青空と日差しが差し込む。地下から地上まで、200メートルが一気にながったのだ。

そして、彼女は飛び立った。

Sky. 1 「飛翔するアゲハ」 (後書き)

というわけで、作者初のロボット物です。

一人称形式ではない時点で初めての試みなので、やや不安が残ります……グダグダになっていくことは、今の私でも十分に分かっってしまうんです。

それでも、アマネ達の自由奔放な様を見て、楽しんでいただけだと思います。

なお、並行掲載している「天日」と比べると、ややゆっくりな更新になると思います。

Sky 2—「Dancing on the nature」

時を同じくして――

地上には、広大な自然を取り囲むような、まさしく包囲網があった。

前線に控えるは、外観的デザインは200年以上前のものと同様ながら、電磁石を用いて、音速で特殊合金の槍を打ち出すニードルガン^①を標準装備した、その名もRGC―レール・ガン・チャリオット。

あえて戦闘車両ではなく、戦いの為の車と名付けられたそれは、第4次世界大戦でも活躍した、第5国家・イギリスの主力兵器だ。

そして、上空に夕焼けの鳥のように旋回を続けるのは、これもイギリス軍の主力兵器、土産鳥^②。最新の技術を駆使して、投下したHDG^③の軌道をコントロールし、確実に狙った位置へと投下させるという代物だ。誤差の修正範囲は、5?単位。

イギリス軍は日本軍と協力関係を築いており、こういった主力兵器のほとんどは日本国内で製造されている。イギリスの戦略力・軍事力を、日本の技術力がカバーしている、まさに戦争の跋扈するこの時代においては、死角なし、と称される肩書きに偽りはなかった。そんな、物騒な面構えをした兵器たちは、先ほどから戦闘態勢に入っていた。

理由は単純。

国籍不明の勢力が、警戒陣形をとっていたこの第17部隊に威嚇攻撃の矛先を向けたのだ。

既に第17部隊の兵士の半数は死亡し、兵器も同等の割合の物が大破・戦闘不能状態になっている。戦闘開始からわずか3分、下手をすればそれにも満たない時間でここまで先進国家の主力兵器を粉碎してのける様は、鬼、と形容するにふさわしかった。

「くそ……どうなってるんだ、これは……？」

第17部隊の本陣で、兵士の1人がそう言って爪を噛んだ。

彼が見つめる先には、こちらも最新技術を駆使して製造された、「翡翠の瞳」という名のレーダーがあった。索敵範囲は平均的でありながら、精度に特化したこれは、範囲内に入った敵は絶対に見逃さない。

レーダーには、正体不明の信号が移動しているさまが見て取れる。しかし――

現在の戦況と照らし合わせると、明らかにおかしい点があった。

1つは、数。

どう見ても1つにしか見えない。先遣部隊が撤退したという見方もあるだろう、この兵士も自然的にそう考えた。しかし、記録を見ると、この信号は初めから1つで、しかも新たに侵入ないし撤退した信号は見当たらない。

もう1つは――その、速度だ。

とにかく、信号の移動速度が尋常でない。レーダーを見る限りでの推定速度は、時速2500キロ以上――マッハ2、と形容される速度と同等、もしくはそれ以上と推測される。それだけの速度で移動しながら戦闘を行うという行為は、人間には不可能なものだ。無人兵器の可能性もあるが、今は操縦者の有無は問題ではない。この信号をどう対処するかが、問題なのだ。

ドゴオン！ と、再び爆発音が、兵士の耳の鼓膜に突き刺さる。

「また撃墜されたか……一体、誰が、何の目的で……」

目を無意識の内に細めながら、兵士は爆音の方向へと目を向けた。深い森の中に設置されたこの本陣では、あまり見通しは良くないが、それゆえに敵に発見されにくい、という利点があった。緑の要塞、という表現は、あながち間違いではなかった。

ふと、ガサ、と音がした。

兵士は警戒の意もこめて音のした方向を向くと、同僚の兵士が2、3人、本陣のオペレート・ルームに入ってきた。

「どうだ？」

そのうちの1人が、怪訝そうな表情でリーダーを覗き込みながら尋ねる。

兵士はそれを耳に半分入れたあたりで、

「ワケが分からない」

と、率直に感想を述べた。

「一体、どんな兵器を使ったら、こんな風な戦闘が出来るのか……」

「……まさか、別国家の新兵器か？」

「いや、それにしても理由が不明だ。今の日本には、もう資源らしい資源は残っていない。それを目的にしていると——不自然だ。わざわざ規模が大きい、この部隊を狙ってくるなんて」

ドオン！ ドドオン！ 爆音が連鎖する。爆発した戦車の炎が、別の戦車に誘爆したためだろう。

——毎日戦場にいると、耳だけでここまで分かるんだな……。

今の世界を憂うように、兵士は考える。

「ま、俺達に出来ることは何もねえよ。ここいらで撤退するか？」

同僚の1人が発した軽いその言葉に、兵士はしぶしぶながらも頷いた。

「ひとまずは、撤退だ。前線部隊にも通達しておけ。第3部隊と合流したのちに、英国軍本部に連絡しよう」

テキパキとした指示を飛ばしながら、兵士はふう、と息を吐く。

——戦争なんて、そんなものだ。

——強い奴が生き残って、弱いやつは潰される。

理不尽だ。

今さらの事を憂いて、兵士はんーっ、と深呼吸をして、空を見上げ——

森の緑一色に抗うように舞い踊る、真っ黒なアゲハを見た。

「派手だねえ」

『IXELIA』に乗り込んで、上空に躍り出たアマネは、悠長にそんな事を呟いた。

「あーあー。何であそこまで派手な兵器を持ってくるのかな？ たかが兵器1つに」

呆れるように、アマネは目を細めた。これから自分が殲滅する人々を憐れむような、哀れむような。

コックピットの中で無重力下に置かれたように中に浮かぶアマネは、周囲に表示されている景色を一瞥し、大体の戦況を確認した。

「さて――『IXELIA』の性能を、もう一度試そうか」

わざわざ口に出してそう言うと、アマネは意識を集中させる。それは、自分の両肩だった。

すると、肩の部分から背中側に垂れていた2本のウェポンラックがガチャン、と音を立て――

バアン！ と、空中に何かを吐きだした。

それはひゅんひゅん、と軽い音を立てて回転し、その状態のままで上昇し続ける。やがて、地球の重力に引かれて落下を始め――『IXELIA』の両手がそれをガチャン！ とキャッチする。

それは、長方形の金属製の何かだった。

実際の人間で言うと、せいぜい携帯電話くらいのお大きさだろう。

しかし、それも人が乗り込む人型兵器のサイズとなると、相当な大きくなる。

コックピットのアマネの両手には、それと全く同じ形状のオレンジ色に輝くブロックが握られている。『IXELIA』と連動して動いているようだ。

そして、バシユウ！ という轟音とともに――

その長方形から、1つずつ、細い何かが出現した。

「さて——戦車に、近接武器は通用するかな？」

それは、両手から1本ずつ、合計で2本伸びる、フェンシングで使われるような剣だった。

とても細く、少しでも間違った使い方をすれば折れてしまいそうな、そんな剣。

しかし、アマネ・クライスクラスは躊躇わない。

それをおもむろに持ち直し、剣先を目標——戦車部隊へ向ける。

「さあ、踊ろう」

瞬間。蝶のダンスが、始まった。

『IXELIA』の黒い姿が、一気にその場からブレる。

どういう理屈なのか、翼もプロペラもなしに浮かんだままの蝶は、ひゅん！ と地に足もつかずに加速する。

そして、戦車部隊へと突っ込んでいく。

向けていた剣先をおもむろに引き、後ろへと向ける。

その時になって——

戦車部隊は、背後からの異常にようやく気付いたらしい。何台かがこちらへと、砲身に向けている。

「遅いね！」

感情が高揚しているのか、アマネはそう叫ぶように言って、右手の剣を振るう。

すぱん。

擬音で表現するならひらがなで表記されるみたいに、あっけなくあまりにあっけなく戦車が1台、2つに分かれ——3秒ほどたってから、轟音とともに炎に包まれる。

しかし、黒いアゲハは、爆炎程度では地に落ちない。

その足で2台目の戦車を踏み、ドン！ と大きく横にジャンプする。その時の衝撃で、2台目も爆散させる。

そして『IXELIA』は、その跳躍を利用して、横一列に丁寧

に並んだ戦車の上を一直線に飛ぶ。

蝶が飛び終わったその後には――

並んだ戦車が1つ残らず2つになり、戦車を通して向こう側が見えるという、異常な現象が起こっていた。

ドドドドドドドド……オオオオオオン！

連続した爆音にも惑わず、黒いアゲハは踊り続ける。

上空から、ひゅん、ひゅん、と何かが落ちてくる。

「おや？」

これにはアマネも、上を見上げた。

水素爆弾
H D G。

爆薬に水素を用いて、遠隔操作で起爆する――威力こそ突出して高い訳ではないが、水さえあれば限りなしに製造できるその爆弾が、いくつも降ってくる。

雨、とまではいかないが、アマネにとっては他人事ではなかった。何しろ、その投下された場所には――彼女が愛してやまない、広大な深緑に包まれた森がある。

「くっ！ 私・の森を、焼け野原になんかせせないよ！」

瞬間、『I X E L I A』は今までのはお遊びだとしても言わんばかりの速度で、あろうことかその爆弾の降り注ぐ中へと飛ぶ。

飛んで火にいる夏の虫、とはこのことだろう――なにも知らないものにとつては。

蝶は、その爆弾を1つ1つ、両手に構えた剣で斬り落して行くのだ。

1つ目を斬り、その勢いを生かして空中で回転し、自らよりも下に落ちて言った爆弾を、切っ先ですくい取るように斬り落とし、もう片方の手に持った剣で新たに降ってくる爆弾を斬る。蝶はそのままの勢いで上空を見上げるような形で、下から切っ先を上げた剣でまた新たな爆弾を突き刺す。

それはまさに、蝶の舞。

あまりに美しすぎて、裏で口合わせをしているんじゃないかとも思わせる戦い。森という緑のステージの上で舞う黒い衣装に身を包んだ役者は、煌びやかな剣を持って舞い続ける。

ステージには敬意を払って、傷をつけないように。

なによりも驚愕なのは――

蝶の周囲では、爆発音が起きないということだ。

そう、遠隔起爆装置のスイッチを1つ残らず破壊しているのだ。相手が爆発させるよりも早く、ステージに汚れを残させないように速く。

仕事は素早く、そして丁寧――アマネは、まさに理想の役者像を顕現したような存在だった。

やがて、舞台に降り注ぐ塵は、無くなった。

「ふう……向こう側は、ネタ切れかな？」

『I X E L I A』の体勢を整えながら、アマネは息も同時進行で整える。

いかに『爆薬』が無限でも、それを詰め込む『球』は無限ではない。水素を直接ばらまいたところで、爆発する訳ではない。

そして、塵をまき散らす元凶、土産鳥キラ・クロウは、一斉に同じ方向へと飛行を始めた。撤退しているのだ。

「ふう……まあ、僕は僕で、森を守ることはできたかな」

アマネはそう言って、撤退を始めたカラスへ目を向け――追うこともせず、ただ、笑った。

「そっちはダメだよ、カラスたち」

蝶は、最後に鳥を哀れんだ。

届かない声を、それと知ってあえて投げる。

「鷹が襲ってくるよ？」

その次の瞬間には――

生き残ったカラスは、1羽とていなかった。

Sky. 3 ―「自由奔放」

「おおー」

ある物は翼を折り、ある物は燃え上がり、またある物は爆発音をそこらじゅうに撒き散らしながら――土産鳥の大群は、無様に落下していく。

そんな様子を見て、アマネは純粋な驚嘆の意を含め、
「よくやってくれるねえ」

と、自分の方が出来る、そう言いたげな微笑を浮かべる。

そして、海岸線の方で――

どがっ、ドンドン！ ドガアアアアアア！ という音がこだまする。それぞれがカノンの調べのように連なり、重なり、響き合いながら、カラスの死をしつこいほどに告げる。

アマネはその音が無重力下のコックピットで超精密センサー越しに聞きながら、右手の人差し指をゆっくりと立て、つん、と虚空で何かのスイッチを押すような動作をした。

その瞬間、しゅん。と、縦30?、横50?位の半透明な長方形が表示される。通信用のモニターだ。

その画面には何も映されずに、黒い四角形を表示し続けるだけだったが――

「あー、あー」

アマネはそんな画面に向かって、自分の声を確かめるようにそんなふうに言う。

「アテンションプリーズ、アテンションプリーズ？　こちらアマネ・クライスクラス」

まるでついさっきまで戦場で兵器を駆っていたとは思えぬ、天真爛漫を表現したような声でアマネは告げる。

「涼介、返事してくれると嬉しいな」

『あー、あー。こちら佐久間涼介。聞こえてたらOKと言ってくれ』

パシユン、と画面に1人の男の顔が映し出される。まだ幼い風貌で、アマネよりも2、3歳は年下に見える。声もそれに違わぬ、男性としては高めの声だった。

涼介、と呼ばれた男の声に、アマネは言われたとおりに答えた。

「おーけー」

『こっちの仕事は終わったよ、アマネ。そっちは？』

「仕事？」

人を貶すようにアマネはひとしきりせせら笑い、

「僕は、仕事なんてしてないよ。僕はただ、この綺麗な大自然を、守っただけ」

『まあ、そんな事だろうと思ったけどね』

対する涼介も同じように笑い、

『その結果、多くの人が死んじやった訳だけど』

「必要悪さ。私が自然を守ろうとした過程で、そうってしまっただけ。彼らには生き延びるだけの力がなかった。たったそれだけの話さ。分かるだろ、涼介？」

『分からなくていいし、分かりたくもないね』

ばっさり、と涼介は切り捨て、

『元は軍人だったんだ。そんな事を認めるには、ちょっと時間がいるかな』

「認めなくてもいいんだよ。これはあくまで、僕の主観の話だからね」

最後にやんわりと微笑んで、アマネは話題を閉じた。

「で、どうだい？ 『FEXER』の初起動は」

フイクサー

アマネは海岸線へ『I X E L I A』を飛行させながら、通信を続けてそんな事を問う。口元には笑みを、瞳には好奇心を浮かべて。

問われた涼介は、目を閉じて邪悪とも取れる笑みを浮かべて、

『最高だね。これが『X-2^{バイター}』の実力かと、痛感させられたよ』

「しかしまあ、予想以上の火力みたいだね」

『まあね』

2人とも笑いながら、学生同士で世間話でもするように話を弾ませる。

そして、2人がひとしきり笑い終わると――

「おや？」

蝶は、見た。

既に蝶の住む森は、はるか後方へと霞んでいる。

アマネが見下ろすのは、波がゆらゆらと揺れる海岸線。白くも見える砂浜に、ひたすらに青い海から緩やかに押しては引き、引いては押す波が揺れる。

ただ――

海岸から少し森の方を見ると、無様に戦車や爆撃機が炎を上げて転がっている。そんな無機質な兵器たちが亡骸を晒している中で――それでも、人間の姿は見当たらない。まるで、砂浜が聖域であるかのごとく、そこだけが美しい自然の息吹を表現していた。

そして、その砂浜から海の方を眺め、沖へと目をやると――

「……変わった形だね」

思わずアマネは呟く。

「これがカラスを撃ち落とした、鷹か――」

そこに浮かんでいたのは、巨大な『Y』の字だった。

そう、まさに『Y』の字としか表現できなかった。

カラーリングはやや濃い青。両肩、と言える部分からはやはり青い、時計の針に使われるような歪な四角形の柱が2つ、天を支えるかのごとくそり立っている。そこから垂れさがるような両腕は、とてもか細く見える。そして、2つの柱の間に控える頭部には、人間で言う目、の部分が1つしか存在せず、無機質な黒いバイザーの

様な部分にぽつり、と赤い点が存在している。

なによりも異様なのは――

その『半・人型兵器』には、脚と呼ぶべき部分が存在しなかったのだ。

本来、脚のあるべき下半身には、肩の柱と同じ形状をした物が1つ、逆さまに、天ではなく、海を支えるようにあるだけだ。もはや人間のように立って歩くべきものではないのだろう。

『FEXER』。

『X-2』シリーズの1つであるその機体は、まさしく正面から見ると『Y』の字をしていた。

蝶は、そんな奇妙なシルエットの鷹を見て――感心したように、笑った。

「涼介。こんな機体、使いやすいのかい？　僕には使えそうにないんだけどな」

『もともと空中戦を前提に設計されたんだよ。だから、空気抵抗になる脚はいらないと判断されたんだろうな』

『FEXER』は浮遊したままで『IXELIA』へと身を寄せる。両者の大きさは同じようなものだが――あまりに奇妙なそのシルエットから、両者が同じシリーズの兵器だと信じない者も多いだろう。

そんな歪な鷹を操る涼介は、名の通り涼しい表情で蝶に語りかける。

『かつこ悪いだろ？』

「そうかな」

しかし蝶は、鷹に対して一瞥をくれ、
「僕は無機物に価値を見出さないからね。ただ、それを人型というのはどうかと思うな。半、をつけてもね」

『アマネの人格を人型に当てはめるのも間違いののかもね』

鷹も引かず、蝶に対して皮肉を言っただけ。

もちろんながら、2人の間に憎悪の心などない。ただ、お互いの

意見を交換し、価値観をぶつけあう。相手がどんな反応を返そうか——それは、大したことではないのだ。

要は、ただの無駄話なのだ。

例えば今が戦乱の世だろうが——彼女たちには、関係などないのだ。ただ、自分達のやりたいことをやる。それだけが目的だ。

そんな世界で、彼女たちが『生き延びる』ために見つけ出したのが、『X-2』シリーズだ。

『ほーい。そこまでな、テメエら』

アマネと涼介の会話に割って入ったのは、涼介よりは低い、男の声だった。

それを見て、アマネはおや、と猫を被るように首をかしげる。

「ヴァル、君は結局今回は出てこなかったんだね」

『出る幕もなさそうだったんでな。それに、俺の『CIXE』サイクスは地上戦が主だからな。もし森を攻撃に巻き込んだら、お前に殺されると思ってな』

『ヘタレですね、ヴァラルド先輩』

涼介はやはり涼やかに、強烈な皮肉を浴びせる。

『その気になれば出てこれたクセに。アマネのだって、あなたの技術を持ってすれば、しのげたんじゃないですか？』

『どうだろうな』

ヴァルはそれをさらり、と受け流して、

『それよかお前ら、早く戻ってこい』

と、声を厳しくして2人に言った。

『地上での戦闘時間が500秒を超えた。早めに地下に潜らないと、索敵されるぞ』

『え？』

「ん。もうそんなに時間が経ってしまったんだね」

『そうだ。なにはともあれ——さっさと戻れ。6番ハッチ開けといったから、そこから入れよ』

最後は呆れるような溜息を混じらせつつ、ヴァルは通信を切った。残された2機はお互いの機体を見合わせながら、

「じゃ、ヴァルがこれ以上怒るのもあれだし、戻ろう」

『そうだね』

そして、鷹と蝶は並んで飛んでゆく。

美しい森の地下200m、自分達の居住スペースへと。

○

ハッチへと自分達の機体を固定し、アマネと涼介は巨大な空間から、狭い通路へと入ってゆく。

並んで歩いていると、決して背の高い方ではないアマネよりも、涼介は頭1つ分ほど背が低い。

「アマネ。君、その服のまんまで『IXELIA』に乗ってたの？」
機械越しでない、ハッキリと通る涼介の声に、アマネは肩をすくめながら、

「いきなりだったんだよ、連中の攻撃は」

青いワンピースを揺らして歩くアマネに、昔の持ち物なのだろうか、国際連合軍の白い軍服に身を包んだ涼介はやはり肩をすくめ、

「……あんな兵器を操縦するのに、その服じゃあ締まらないでしょ……」

「でも、キチンと動いただろう？ 前回のようなミスも無かった訳だし、それでいいじゃないか」

「結果論を聞いている訳じゃないんだよね」

「おや。涼介、君は結果よりも過程を重視するのかい？ 過程に重きを置いて、結果がベターで止まってしまっただけじゃないよ。僕は例え過程をおろそかにしても、ベストな結果を目指すんだ」

「おろそかな過程では、結果は生まれないよ」

自分の考えを述べるアマネと、真っ当な意見を述べる涼介。

そんな不毛極まる言い争いを繰り返して、2人は目的の部屋へ

辿り着く。

「おお、遅かったな」

その部屋は、灰色のコンクリートで作られた無機質な直方体の中に、テーブルや冷蔵庫、パソコン、キッチン、電子レンジ、果てはテレビまで置いてある――地上とは全く違う、生活感のあふれる部屋だった。

その部屋でコーヒーを飲みながらテレビを鑑賞する男が、入ってきた2人に手で挨拶の意を示す。

そんな様子を見て、アマネは困ったような表情を作って、

「焦ってた割に、結構余裕だね、ヴァル」

「余裕じゃないさ。余裕じゃないから、落ち着こうと努力してんだよ」

そんな風に言っただけの男の名は、ヴァラルド・ラーゼフォン。現代の軍人なら誰でも知っている、第4次世界大戦で連合軍を指揮し、勝利へ導いた偉人、アブロード・ラーゼフォンの孫に当たる人物だ。

だが――今の彼の状況を見れば、英雄の血縁者とは程遠い事が分かるだろう。

「全く、自分だけ地下から高みの見物とは――かのラーゼフォンも落ちぶれたね」

「高みの見物だと？ 勘弁してくれよ。俺がああ状況で出て行ったら、俺、死んでたぞ？」

冗談のようにヴァルは語るが、それらは全て紛れもない事実だ。

「先輩はやっぱりヘタレですね」

と、涼介が再び皮肉を浴びせる。ヴァルはそれを完全にスルーして、アマネに言葉をかける。

「今回はミスらなかったか？」

「まあね。なんとかなったよ」

「ならいいがな。修理するのも大変なんだからな」

アマネと涼介をテーブルに座らせて、3人で向き合う形になる。
すると、涼介が周囲を見回して、ふと気付いたことをそのまま口にする。

「他の2人はどこへ？」

「キールさんはまた寝てる。輪は散歩にでも出てるんじゃないか？」
何のこともなし、といった感じで言い終えると、ヴァルは再びコーヒーを口に運ぶ。

その言葉に、涼介はふーん、と答え、

「暇なんだなあ、2人とも。ついさっきまでこの辺が戦闘区域だったのに」

「あの人たちはそういう人たちだし、アマネだってそうだろう」

「おや」

と、ここでアマネは少し不機嫌になって、不気味な笑みを表情に浮かべながら、

「私は上で自然を守っていたんだよ？ 暇なんかじゃなかったんだけどな。一度、森をH D Gで焼かれそうになった場面もあったよ」

「そうかよ」

しつこいなあ、うっさいなあ、そう言いたげにヴァルは顔をそむける。

アマネはそんな幼馴染の様子に、ふう、と溜息をつき、

「輪が外にいるなら。僕が様子を見てくるよ」

といって立ち上がり、外へと出ようとする。

「気をつけてよ？ まだ軍の連中がいるかもしれない」

「大丈夫だよ。興味ないしね」

飄々と言い放ち、最後に余計な一言を付け足した。

「僕も、もう一度、ゆっくり自然を見ておきたいしね」

Sky. 4 ―「きぼう」

じゃあ、とアマネは手を振って、部屋を出てゆく。

残されたヴァルと涼介は顔を見合わせて、やれやれ、といった感じで首を振った。

「興味がない事で死ぬのはまっぴら、じゃねえのかな」

「そんな事言ってたんですか？」

相変わらず敬語で話しかける涼介に、ヴァルは苦笑して、

「あいつとは、色々あって長い付き合いだけど――未だに、よく分からん奴だな」

最後に肩をすくめて、柔らかい声で言った。

「何を考えて生きてるんだろうな、アマネって人間は」

○

あれだけの戦闘のちに、眼下に広がる森が無傷だったのは幸いだ。

再び丘の上から、戦闘前とほとんど変わっていない風景を眺めてアマネは考える。

「本当に良かった」

アマネはいつも通り、という言葉のよく似合う表情でそう呟き、そっと右手を森へ伸べる。

すると、それを感じ取ったように、森から1つの黒い影が、その白い右手へと誘われるように飛んでくる。

黒い翅は黄、青、赤――さまざまな色を周囲にふりまき、それを必死にも見える速度で振りながら、ゆっくりと近づいてくる影。

その影の名は、アゲハ、という。

アマネは徐々に、徐々に近づいてくるアゲハに対して、神にでも

祈るような動作で右手を差し出す。アゲハはそれを確認するようにくるくる、と手の上を2、3度旋回した後、それを認めたように中指の上に6本の足を落ち着かせる。

アマネはその翅をゆっくりと自分の顔に近づけて、

「君も無事で何より」

と、目をうつとりと細めながら呟いた。

「やっぱり、ここは大切な場所だ。こんなに綺麗な蝶を爆撃しようだなんて――」

そこで空を見上げ、今度は苛立ちを抑えるように目を細める。

「人間とは、悲しいものなんだね」

アマネは言葉通り、悲しくてならなかった。

彼女にとっては、他の人間がどうだろうとか、戦争がどうとか、そういった世俗的な事情は全く眼中にない。町中に敷かれるアスファルトの細かい模様を、覚えようとしないと同じことなのだ。

ただ――現代の地球に残された、この美しい自然には、敬意と親愛の念を持って接していた。

「人間だけの地球じゃないだろうに……こんなに美しいのにね」

アマネは右手ごと蝶を瞳のすぐ前まで持つてくる。蝶はここぞと言わんばかりに、ゆらりゆらり、と陽炎のように翅を揺らした。自分の美しさを誇示しているような、そんな仕草だった。

それを見てホッとしたように息をつく、アマネは右手を空へ掲げる。

その仕草がカギとなったように、アゲハは再び美しいその翅を振りまいて、はたはた、と森の中へと消えてゆく。

アマネはアゲハに向かって「いつてらっしゃい」と笑いかけ、その小さすぎる背中へと手を振った。

「アマネお姉ちゃん」

それからしばらく空を眺めていると、背後から幼い声かけられる。

アマネは半ば反射的に振り返ると、そこに地上へ出た本来の目的があると確かめて溜息をつく。

「輪、ここにいたんだね」

「うん、いたよ。空気がおいしいの」

そう答える少女は、やや赤色の混じった長い髪と、それと対になるような緑色の瞳を持っていた。年齢は11、12程の、年端もいかない、という言葉がそのままあてはまるような、儂げな少女だった。

彼女の名前は、輪。

苗字はない。誰も知らない。ただ、周囲の人間からは『輪』と呼ばれ、自分でも『輪』と名乗っている、それだけの名前。

アマネは輪に歩み寄って、左手を頭の上に乗せて、髪をくしゃくしゃと撫でる。

「ダメじゃないか、勝手に外へ出ちゃ」

「いいの」

はつきりと輪はアマネの顔へ言った。

「だって、アマネお姉ちゃんだってさっき出てたじゃない」

「僕は良いんだよ。だって戦争なんかに興味ないしね」

微妙に答えになっていない事を言いながら、アマネは続ける。

「でも、輪はそうではないだろう？」

「どうして？」

無邪気に笑いながら首をかしげる輪に、アマネはやれやれ、といった感じでかぶりを振って、彼女の右手を掴む。

「もし、命を狙われたら、どうやって逃げるんだい？　こんな体で」

輪、と呼ばれた少女には、普通とは違う点がいくつももある。

彼女には――右目の視力、右耳の聴力、右腕の肩から先、右脚の付け根から先がない。右半身の身体機能を、ほとんど失っているのだ。

ヴァルの言う限りでは、肩の傷を見る限り、地雷を踏んだことで

焼き切られたということらしい。視力も聴力も、その際の爆音と閃光で失ったのだろう、と。

輪本人ですら、幼い頃の事は殆んど覚えていないので、あくまで推論でしかないのだが。

目と耳は形こそ残っており、手足も義手・義足を着けてはいるが、所詮は形だけだ。自らで地につこともままならず、車椅子でしか移動できない体なのだ。

これでは、満足に自分で自分の身を守ることままならない。

「大丈夫だよ」

しかし輪は、そんな体でも全く陰鬱なそぶりを見せずに、蛍のように明るく笑った。

「わたしには『QUARX^{クォークス}』があるもん。自分の命くらい、守れるよ」

「じゃあ、その『QUARX』は今、どこにあるんだい？」

5、6歳年下の子供にも平気で理屈をこねるアマネ。輪もその質問に、「それは……」と言葉を詰まらせる。

アマネは目を優しく細め、輪の髪をさらさらと撫でながら、

「だから、すぐに『QUARX』で身を守るためにも、外に出るときには、誰かと一緒に来なきゃダメなんだ。分かったかい？」

「うん……ごめんね、アマネお姉ちゃん」

「分かればよし」

最後にぽん、と頭に手を乗せて、

「さ、下に戻るよ。僕もやや空腹気味だし、食事にしよう」

「うん」

アマネは輪の背後に回り込むと、車椅子の取っ手を掴んで、ゆっくりとそれを押し始めた。

アマネと輪が部屋に戻ると、そこではいそいそと部屋を行ったり来たりするヴァルと涼介の姿があった。それぞれが本や箱などを抱えて、それを整理しているようだった。

「何をしているんだい？」

「おお、なんか散らかってるってキールさんが言ってるな」

ヴァルがふう、と汗を払いながら、

「整理しろってさ。暇ならお前らも手伝え」

「僕の荷物はないんだから、片付けなんかは手伝う義理はないね。勝手にやればいいさ」

さも当然のようにアマネは言う、キッチンの方へと歩み寄っていく。どこから取り出したのか黒い髪紐で、長い黒髪を器用に1つにまとめ上げる。

「お姉ちゃん、料理するの？」

左手だけで操作できる特殊な車椅子でアマネの後を追いつつ、輪が嬉しそうに語る。

しかし、アマネは「まさか」と一笑に付し、

「僕は料理なんかしないよ。栄養なんて、摂取出来ればそれでいい」
そう言いながら、アマネは冷蔵庫からウエハースの様な物を3つ取り出した。それぞれ緑、白、黄と色で分かれている。

いわゆる栄養食という奴だ。現代ではそこそこ普及した食べ物で、栄養価も高く腹もちもよい、ため、主要都市部の学生などにはもちろん、軍部にも非常食として多く支給されている。

ちなみに味は『無』。苦い、とか、甘い、とかではなく、まるで固体化した空気を食べているような感覚である。

「僕はこれで十分だよ。その料理とやらは、ヴァルに任せておこうじゃないか」

緑色の栄養食を口に放りばりばりと咀嚼しながら、アマネはキッチンから出てくる。

「アマネ、よくそんな美味しくないの食べれるよねえ」

涼介が片付けの手を止め、ヴァルとは対照的な表情でアマネに尋

ねる。

「平気なの？」

「僕にとっちゃ、食べ物なんてみんな一緒さ。栄養を摂取するための物」

「動物たちに失礼じゃない？」

「僕は菜食主義さ。動物の生肉なんて、食べたくも無いね。動物は動物らしく、自然のままで生かしてやるのが一番さ」

そう言いつつ、次の白い栄養食を口に放って咀嚼する。もぐもぐ、という擬音が自然と似合いそうなその口の動きは、何から何まで超然としているアマネ・クライスクラスの『人間味』の片鱗なのかもしれない。

しかし、涼介はやはり涼しげにその仕草を感じようともせず、
「植物だって生き物だよ？ 不平等じゃないかな」

「真に平等を作れるとしたら、とつくに戦争なんか終わってるさ。」

涼介、君がそこまで平等にこだわるのなら軍に戻れば良い。世界を平和にしてごらんよ。僕は興味はないけどね」

「……」

さらりと涼介の言葉を交わしながら、アマネは3つ目、黄色の栄養食を食べ始めていた。何が違うのか、今度はぽりぽりと少しずつリスのように齧っていく。

対して反論を封じられた涼介は、負け惜しみのように肩をすくめて、

「アマネには敵わないや」
と言い捨てた。

Sky 5-「火蓋」

「俺だって戦争を止められるなら、とっくにやってるよ」

涼介は深く椅子に腰を落ち着けながら、アマネに向かって呆れるように呟いた。

対するアマネは相変わらずのペースで栄養食をちびちびと齧りながら、

「出来ないから君はここにいるのかい？」

「そういう訳じゃない。むしろ戦争を止めるなら――」

そう言ってしばし目を閉じた涼介。3秒ほどたって開かれた瞳には、どこか攻撃的な色。

「まず、アマネみたいな人を始末するかな」

「やるならやってみるといいよ。白兵戦なら負ける気はないからね」
しばし睨みあう2人。

「なに？ お姉ちゃんも涼介くんも、喧嘩するの？」

それを見ていた輪は、心配する訳でもなく、むしろ楽しそうにうきうきとそういった。

「たのしみー」

「輪、お前なあ。少しは止めろよ」

隣に座っていたヴァルが、それをたしなめる。

そんな光景も視覚・聴覚に働きかけていないかのように2人は睨みあう。

「アマネはさ。もっと人の事を考えるべきだと思うんだよね」

先に口火を切ったのは涼介だった。彼はやはり涼やかに、

「何て言うか、自分勝手すぎる」

「それで？」

アマネはそんな涼介の様子に、まるで挑発するような笑みで答える。

「そんな理由で私を始末しようとするのかい？ 自分勝手もいいと

こだね。国連軍も落ちぶれたもんだ」

「軍人なんてそんなものだよ。組織のためだ、地球のためだ言うけど——結局は、自分の目的のために戦うのさ」

「だから私怨で殺しもする、か——」

ふふっ、とアマネは穏やかに、まるで聞き分けのない子供にしようがないな、とでも言いたげに、

「なら、僕も必死で抵抗しないとね」

ちびちびと齧っていた栄養食を喉に押し込むように一気に食べ、緊迫感のある言葉とは裏腹にうーん、と背伸びをする。

涼介もその様子を見ていたが、そんな彼にアマネは話しかける。

「どうしたんだい、涼介」

結んでいた髪をほどき、再びおろしながら、

「一瞬の間でもうかがってるのかい？　ならいい情報だ。今の僕は完全に無防備だよ」

「俺だって武器もなしに突っ込むほど馬鹿じゃないってことだよ」

「ヘタレもいいところじゃないか」

苦笑いしながら——彼女は、着ていたワンピースの紐に手をかける。

「アマネ」

あわや、というタイミングでヴァルが低い声で遮った。アマネはぴくり、と動きを止め、

「何だい、ヴァル」

「何だいじゃねえ。お前も女なら、羞恥心つてものを持てよ」

「嫌だなあ」

アマネはワンピースの裾をひらひらと揺らしながら、

「僕の裸なんか見たって、嬉しくないだろ？」

「私はうれしいよ、お姉ちゃん」

車椅子の上から輪が言った。

「お姉ちゃんとお風呂入る時、楽しいもん」

「そうかい、輪？」

アマネはふふっと笑いながら、

「そう言ってくれると、僕も嬉しいな」

「えへへー」

輪もまたくすぐったく笑い、車椅子を器用にくるくると回転させる。

「ねえお姉ちゃん。今からまた一緒にお風呂入ろうよー」

「ん、そうだね。僕も汗を流したいし……」

車椅子の後ろの取っ手を握りながら、アマネは風呂場の隣接した洗面所へとそれを押しながら歩く。

去り際にヴァルと涼介に向かって、

「覗くのはいいけど、別に得なんかないよ？　それでもいいならご勝手に」

左手を挙げて、去って行った。

「なんなんですか、あの人……」

涼介はしばし黙り込んだままで過ごすと、ふとそんな事を言った。それに対して、ヴァルが答える。

「あいつに人間の性別の概念を持ち込まない方が良いぞ。一人称も男っぽいし」

彼女の事をよく心得ているのだろうか、ヴァルは昔を思い返すように低い天井から遠くを眺めた。

「昔から変な奴だったけど、最近は特にひどいな」

「そう言えば……」

涼介は気になった、という風にテーブルに身を乗り出し、
「ヴァラルド先輩、いつからアマネと一緒にいるんですか？」
「ん？」

その問いに、ヴァルは少しだけ思い返すように間を置き。
やがて、ゆっくりと目を細めて語り出した。

「俺とあいつが、まだ8歳の頃だな――10年くらい前」

「最初からあんな変な奴だったんですか？」

「んー」

ヴァルはしばし考え込むように顎に手をあて、

「そう……でも、ないな。最初は普通の奴だったような気がする」

「いつから狂ったんですか？」

「狂ったってお前」

半分笑い、半分咎めるようにヴァルは返す。

「仮にも俺の幼馴染だぞ？　少しは気を遣えって」

「じゃあ、いつからおかしくなったんですか？」

「……お前にはアマネがどう見えてるんだよ」

大きく溜息をつくヴァルに対し、涼介は「だって」と言い、

「アマネ、なんだか人間じゃないみたいですから」

「人間だよ。人間じゃなかったら、どうやって『IXELIA』を

動かしてるんだよ」

「ますます不気味じゃないですか」

涼介は冗談を言っていると誇示するように大げさに笑い、

「俺だって、アマネは仲間だと思ってますけどね——」

「苦手か？」

「……はい」

視線をそらしながら、涼介は言う。

まるで、親に怒られている子供のよう。

「怖いんですね。腹の底では何を考えてるのか、分からなくて」

「へえ、少年兵あがりのお前が怖がるってことは、あいつも本物か」

「？」

ヴァルの放った意味深な言葉に、涼介は首をかしげる。

「どういう事ですか？」

その問いに、ヴァルは一瞬なにかを言いかけたが——すぐに口を

閉じ、

「今は話す気にならねえな」

「ケチですね」

「うっせ」

吐き捨てるようにヴァルは言った。

「また機会があったら話してやるから」

「はい」

手をひらひらと振って、涼介は返事をした。

○

「『X-2』シリーズ、か」

男はPCのモニタに向かって、忌々しげにそう呟いた。

国連軍本部。第1国家・アメリカ合衆国のどこかに存在するその施設の最上階——まるで、世界的企業の社長室、もしくはそれ以上の広さを持つ部屋で、それに見合った大きさのデスクに肘をついてモニタに向かっていた。

モニタには幾何学模様が浮かんでおり、そこから加工された声が聞こえてくる。

『ええ、まだ生き残っていたんですよアレは』

「忌々しいな。旧日本軍の化石めが」

『まあまあ、そうカッコなさらず』

モニタ越しの声は、どこか平坦で、相手を落ち着けようとしているようにも、逆に苛立たせようとしているようにも聞こえた。

『今の国連軍の戦力なら、『X-2』をつぶすのはたやすいのでは？』

「そうとも言い切れん」

男は険しい表情で、

「化石の面倒なところは、ノウ・ドライヴNOH-Dの存在だ。アレがあるから厄介だな」

ノウ・ドライヴNOH-Dとは、X-2シリーズの駆動機関の事だ。

旧日本軍の最高の技術とされ、その技術はかつて開発中だったX-2シリーズに導入される——はず、だった。

しかし旧日本軍の敗北と同時に、その技術はX-2シリーズと

もに闇に葬られ、設計図の欠片も残っていないらしい。

「まったく、まさかX-2が残存していたとはな——しかも、それを所持しているのは……」

『ええ、全くの素人です。軍人でもなければ、テロリストでもない』
モニタの声はさも面白そうに、

『どうです？ 国連軍は手を出せませんよ。今や日本軍はあなた方の配下——それを理由もなしに攻撃するのは、できませんよねえ』
「こちらは一部隊を攻撃されているぞ？」

『あれは彼らの正当防衛ですよ。兵器の不法所持にしても、X-2は歴史から葬られているゆえに、証拠がない』

「……考えたな、連中は」

男はますます顔をしかめながら、

「聞けば聞くほど腹立たしい。しかも連中には、元帥の孫までいるそうじゃないか」

『ヴァラルド・ラーゼフォンですね。しかも、彼にはもう1人の『鍵』が付いている』

ぴく、と男の眉が動いた。

「なんの話だ」

『おおっと？ これ以上は言えません。こっちも商売なんでね』

おどけるようにモニタの声は言った。まるで道化師のように、人をからかうような声で。

『そちらがまた新しい情報を渡してくれるなら、考えてもいいですよ』

「……ヤブ情報屋め」

『ヤブでも林でも結構。じゃ、私はこれで失礼しますよ、クアールト大佐』

ブツリ。音とともに、音声と画面上の幾何学模様が消える。

男——リーヴァ・クアールト大佐は、呆れたように溜息をついた。
「まあ、連中が何をしたいのかはわからんが——」

懐からタバコを取り出し、慣れた手つきで火をつける。驚いたこ

とにライターを使わず、机に直接擦りつけて着火した。

「――世界を統括する軍だ。兵器の勝手な使用は、認められんな」
重々しく、白い煙を吐き出した。

Sky. 5 「火蓋」 (後書き)

ひと段落です。

なにやら思わせぶりなワードがたくさん出てきますが、作中でも言っている通り、アマネ達には戦争を起こす気も、とめる気もありませんよーwwww

ただ、彼女たちの気ままな様と、それに翻弄される世界の様子を描いた作品です。

さて、次の話では、X-2の細かい設定についての描写が入るかと思います。お楽しみに。

Sky. 6 「舞い踊るカラス」

「キールさん」

ある日の朝。涼介は他の誰よりも早く起床し、とあるドアを叩きながら誰かの名を呼んだ。

「起きてましたら開けてください

ぴー。かしゃん。

あまりにもあっさりとした解錠の音に、涼介は軽く溜息をつく。

——警戒心がないなあ……。

「……。開けますよ?」

若干苛立ったような口調で、涼介は横にドアを開けた。

そこは、まるで地下深くの牢獄のような部屋だった。

部屋には光が差し込む部分はなく、真っ暗にも見えるのだが——ところどころから発せられている電子の光が、まるで壁の隙間から光が差し込む牢獄のような印象を与えているのだ。

電子の光。

ようはコンピュータの光だ。それらの画面や、変圧器などのありとあらゆる部分から漏れる光が、唯一の明かりとなっている。

「キールさん?」

涼介は暗い部屋の中へと足を踏み入れ、先と同じ名前を呟いた。

「いい加減に起きてください?」

「んあー……うるせえな。面倒くせえ」

機械の山の中に、半ば埋もれるように置かれたベッドから聞こえてきたのは、実にけだるそうな若い男の声だった。

彼の名は、キール・ミスリルハイド。

涼介達の仲間ではあるが、前線に出る事は殆んど無い。だからと

言って後ろからあれこれ指示を飛ばす訳でもない、そんな男だ。ただし知識は余計なほどにある男で、普段は傷ついたアマネ達の機体を修理する役目を担っている。

キールは「うあー」と立ちくらみを無理に我慢しているような声をあげてから、

「今行くから待ってろ、ガキが」

そういつてゆっくりのんびりと上半身を起こす。

涼介ははあ、と溜息をついた。元は少年兵だった彼は、こういっただらしない生活にはつい氣を立ててしまう。

「とりあえずご飯食べて、それから『I X E L I A』と『F E X E R』の修理を手伝ってください」

「面倒くせえな」

整えれば美しいであろう黒髪をぐしゃぐしゃと掻きながら、

「お前らもつと丁寧に操縦しろや。修理する身にもなってみろ」

「操縦する身にもなってください、このニートが」

「……はあ」

負けじと、と言わんばかりに、キールは溜息をついて、

「いちいち理屈っぽいな、涼介。アマネより理屈っぽい。面倒臭いことこの上ない」

「あんな人と一緒にしないでください」

苦笑しながら、涼介はいつの間にか部屋から身体を全て外の通路へと移動させている。

「早くしてください」

「ハイハイ、少年兵サマ」

「今は違いますからね」

涼やかに突っ込みを入れつつ、涼介は既に部屋に背を向けて歩み出していた。

機体を格納しているハッチ。

現在は『I X E L I A』と『F E X E R』の2機がそこに収められている。まだ前回の戦闘でのわずかな損傷などの修理を行っていないのだ。

元は軍人であった涼介は、こうした兵器においては、わずかな傷や汚れすら、残しておけば死に直結しかねない事を身をもって知っている。実際にそうした整備を怠ったが故に、命を落とした同業者を何百人と見てきた。

彼は『F E X E R』の損傷部分を入念に確認しながら、『I X E L I A』に手をつけているキールへ声をかける。

「そっちはどうですか？」

「んあー。まあ、前よかはマシだわ」

キールはけだるそうな声とは裏腹に、鋭い目と素早い手付きで『I X E L I A』を点検していく。

「前みたいに大破されちゃたまらんからな」

「珍しく同感ですよ」

皮肉を返しながら、涼介は続けざまに呟く。

「アマネはヘタですからね、X-2の操縦が」

「素人であるここまで出来るだけ天才的だろ」

「そんな免罪符で貴重な兵器を壊されちゃたまりませんよ」

「面倒くせえな」

キールは心底苛立ったような声で、

「だったらアマネを殺しゃあ済むだろうが」

「いやいや」

涼介はタラップをかんかんと昇りながら、

「そんな事をしたら、俺が破滅ですよ。キールさんだって分かっているくせに、意地の悪い人ですね」

「お前が言うか」

言い合いながら、キールは「ん」と軽い声を上げる。

「どうしました？」

「ああ、ドライヴが少しイカレてるな」

「ドライヴ？ ノウ・ドライヴ NOH—Dですか？」

ん、とキールは頷く。

「あーあー。アマネの操縦の乱雑さが垣間見えるな」

キールは懷から工具を取り出し、先と同じ台詞を呟いた。

「修理する身にもなれっての」

ノウ・ドライヴ
NOH—D。

NitrogenHydrogen

文字通り、窒素、酸素、水素の3つを主燃料とする駆動機関だ。

かつての旧日本軍が、地球上から燃料が失せて行くのを危惧し、いち早く開発した、と言われている。その燃料となる3つの元素は地球上に溢れているため、事実上の永久機関である。

X—2シリーズはこれを搭載することで、戦場で半永久的に活動する事が出来る画期的な兵器として、開発段階では非常に期待されていた。

だが——第4次世界大戦以降は、資料も全く残っておらず、ノウ NOH—Dの存在はX—2とともに闇に葬られた、とされている。

「ただでさえ便利なもんなのに、乱暴に扱ったら壊れるに決まってるんだろ」

そんな、存在すら隠匿された機関をテキパキと直してゆくキール。途切れ途切れに発する言葉からも、どこか慣れたような余裕が感じられる。

対して涼介は、『FEXER』に目立った異常がない事を確認すると、背面部のイオンブースターを点検していく。

「ま、世の中には必ずウラがありますからね」

「少年兵サマの言葉には重みがあるな」

「元ですけどね」

律儀に突っ込みを入れながら、涼介は工具でブースターをいじり始める。

そんな様子にキールはふう、と哀れむように溜息をつくど、

「そんな角ばった性格じゃ、いつか心労で倒れるぞ」

「きちんとストレス発散してるんで大丈夫ですよ」

「どこで？」

「上です」

上。

それはつまり、涼介たちのいる地下居住スペースの上――

戦場の事だ。

「人を殺すのは嫌ですよ、正直」

涼介はまるでいい訳でもするように、

「ただ――楽しいのも事実なんですよね」

「問題児が」

かんかん。どこかをトンカチで叩きながらキールは肩をすくめた。

「それじゃあ軍をクビになってもしゃーないわな」

「クビになったんじゃなくて、自主退職です」

「似たようなもんだろ」

そんな言い合いをしながらも、2人はほぼ同時に作業の手を止めた。もちろん、修理が終わったからだ。

お互いに同じ時間の作業だったものの――手間自体は、キールの方がよっぽど多い。その事からも、彼の手腕の高さが垣間見える。

涼介は内心でキールに感心しつつ、

「じゃあ、戻りますか」

「おー」

2人はタラップを降り、出口へと歩を進める。

「それにしても、キールさんはホントに手際が良いですね」

「面倒くせえことは早く終わらせたいからな」

「すごく『らしい』ですね」

突っ込みを入れつつ歩いていると、

「お」

キールが歩みを止める。

「？」

「すまん。涼介、先に戻ってろ」

「はぁ。仕事ですか？」

ん、とキールが頷くのを確認して、涼介も同じようにうなずいた。

「じゃあ、先に戻ってます」

涼介が出口から外へ出て行くのを確認して――

キールは懷から携帯電話を取り出し、器用に片手で開き――
通話ボタンを押し、耳にそれをあてた。

○

「もしもし、大佐ですか？」

『よう情報屋。ちょっと聞きたい事がある』

「報酬は？ どのくらい？」

『……日本円で100万。どうだ？』

「んー……厳しいですけど、いいでしょう。お得意様のよしみで」

『感謝するよ』

「で、ご用件は？」

『例によって他言無用で頼むよ』

「お任せを。……それで？」

『うむう』

「……」

『端的に言おう。……X-2シリーズについての情報をよこせ』

「……大きく出ましたね」

『連中は――元帥の孫たちは、世界中の軍という軍を混乱の渦に巻き込むだろう』

「それはそれで面白そうですね」

『馬鹿を言え。……ともかくだ。知っている事を吐いてもらおうか』

「いいですよ」

『……』

「……？ どうしました？」

『いや、あっさり承諾するとは思っていなかったからな』

「ああ、そういうことですか」

『……』

「ご心配なさらず。きちんと事実を述べますよ。ただし――」
『？』

「報酬は、高くつきますけどね」

「……むう」

『情報屋』との会話を終え、端末の電源を切りながらクアラト大佐は重々しく溜息をついた。

——仕事を頼んでいるのはこちらだが……

——どうにも信用を置けんのは、私の杞憂だろうか？

数年ほど前に、軍部の諜報部づてに紹介を受けた『情報屋』。本名はもちろん、年齢、性別……ともすれば本当に人間かどうかすら疑わしい、そんな存在。

しかしながら、『情報屋』の持ちこんでくる情報は非常に正確で、そのおかげで勝利をもたらされた事も少なくない。

だが——それ故に、大佐は疑いを深める。

「……」

重々しく沈黙し、彼は考える。

味方と称して懷に潜り込み、一定の信頼を置いたところで反旗を翻す——というのは、スパイ戦術の初歩も初歩。歴史を振り返れば、世代を超え、親子で60年以上もそうした戦法を続けていた者もいるほどだ。この『情報屋』も、それを狙っていると考えるのが自然だろう。

何せ、ここは世界最大の国連軍。

『世界のあらゆる戦闘行為を、武力を持って鎮圧する』ことを目的とした、超巨大軍事組織。いつどこでテロまがいの攻撃を受けてもおかしくない。むしろそういった行為がなければ、逆に不自然ともとれるだろう。

「……まあ、いちいちこの机にしがみついても仕方がないな」

大佐は苦笑交じりに、半ば投げ出すようにそう呟いた。

彼の直感は告げている。

「物事は、『早く、速く』が肝心だからな」

彼はモニターから1つの番号を呼び出す。

告げる言葉は、ただ1つ。

○

今日も朝日が心地よい。

すっかり定位置となった小高い丘から、アマネはひたすらそう感じていた。

「……っうーん」

大きく伸びをしながら、彼女は半覚醒の頭を起こし始める。

「ああ、やっぱり太陽は綺麗だなあ。全ての命を40億年以上も見守り続けてきたんだからね」

最古の単細胞生物もそう。

植物もそう。

魚類もそう。鳥類もそう。恐竜種もそう。

もちろん——人間も、そう。

「……はあ」

そう考えた途端に、アマネは物憂げな表情でうつむく。まるで眼前の太陽に頭を垂れるように、

「つくづく申し訳ないよ、太陽。キミに悲しい場面を、いくつも見せちゃってさ」

互いにいがみあう事は自然な事だと、アマネは考えている。

彼女にとって、人間は『動物』とは違う。

人間の愚かな面は、その生存競争に機械むきぎょうを持ちこんだところだ。

「つくづく愚かだねえ、ヒトは。そう思わない？」

人間でありながら堂々とヒトを否定するアマネは、そう呟きながら眼下の森へ右手をのばす。

すると、それに呼応するように飛来する、黒い小さな影。

黒い残像を淡く残しながら、小さな体で美しく黒い翅を精一杯に振り飛来する影。

アマネはいつも通りにアゲハへと手を伸べながら、

「君も、何かを考えて生きているんだろうねえ。何を考えているのか知りたいな」

くすぐったく笑みを浮かべながら、アマネは蝶に問いかける。

その表情さえ見れば、いつの時代にもどこにでもいる、ただの少女の笑みだった。

蝶は問いかけに答えられず、照れ隠しのように翅をユラユラと揺らめかせる。アマネはそれを見て再び笑い、

「やっぱり君は頭が良いなあ」

まるでアゲハの思考を読み取ったかのように、妖しく笑う。そして、その笑みに呼応するように、アゲハは翅を揺らめかせ、森の緑へ消えてゆく。

アマネはその様子を最後まで見送ると、小さく手を振って別れを告げる。

「はあ」

マラソンの後に息を整えるように短く溜息をつき、アマネは太陽に背を向けて歩き出す。

地下・居住スペース。

アマネ達の暮らしている場所であると同時に、現在は潜伏地でもある。そのイメージとは裏腹に、内部の長い通路は病院のように白く清潔だ。

他に服がないのか、以前と変わらぬ青いワンピースの裾を揺らしながら、アマネはその通路をすくと、軽い足音を立てながら歩く。その顔には相変わらぬ薄い笑みが張り付いており、心中までは傍目からは読み取れない。

しばらく歩き続けると、アマネは通路を抜けて、ひととき開放感のある空間に辿り着いた。アマネ達の機体を格納しているハッチだ。

かつかつ、と自分の足音が反響する音に耳を澄ませながら、アマネは自分の機体の正面へとさらに歩み寄る。

「やあ、『IXELIA』」

立ち止まり、彼女は目の前の黒いシルエットに語りかけた。

「――はあ。」

「――最近はお前も来なくて、結構だねえ。」

「――ただ、退屈なんだよなあ。」

アマネが最も大切に思っているのは、この地下施設の上にある広大な森だ。

現在の地球の環境からみれば、こういった海と隣接した森林地帯などはいくらでもある。むしろ、この程度の規模はまだまだ小さいほどだ。

しかし、アマネはどういう訳かこの場所から離れようとはしない。退屈だなあ、と思いながら溜息をつくとき、

「そんなに退屈なら、連中について行きやあ良かっただろうが」

背後から気だるそうな男の声があった。アマネは振り返り、その姿を確認して、

「キールかい？ 珍しいね、君が外に出てくるなんて」

「放っとけ」

キールは面倒臭そうに返事をしながら、アマネへと語りかける。

「お前こそどうしたんだ？ またぶっ壊す気かよ」

「まさか。僕はもう同じヘマはしないつもりだよ？」

「どーだかな。直す身にもなってみろ」

「おや。それは君と涼介の仕事だろ？」

おどけるようにアマネは首をかしげる。

「僕の興味の対象はそこにはないよ。ただ『IXELIA』と一緒に戦って、上の森を守る事が出来れば、それだけで満足さ」

「あーそうかい」

面倒臭そうにキールは返事をして、

「いっそお前がどこかに旅にでも出てくれりゃ、国連軍の連中もこ

「こを狙う事はないだろうよ」

「その時はその時さ。気が向いたらふらっと出かけてみるとしようかな」

言葉の1つ1つが歌うように軽い。表情も明るい少女のそれと同じだ。

キールはその頭脳を持ってしても、アマネ・クライスカラスという『人間』の心情を読み取ることが出来ない。今の言葉が本当か、それとも嘘か――

――いいや。いちいち考えるのも面倒だしな。

2秒後にはすんなりと思いを放棄して、キールは寝癖のついた黒髪を掻く。

「で、ヴァル達はどうかなんだい？」

ふとアマネはキールに尋ねる。もちろん、表情はそのままだ。

キールは「ああ」と思いだしたように、

「順調、みたいだな。そろそろ着いてる頃じゃないのか？」

「そうなんだ」

アマネはふと表情を疑問形に変化させ、

「輪は大丈夫かな？ 実戦は初めてだよな」

「大丈夫だろ。死んでも後で拾っとくから安心しろ」

「そうだね」

適当に会話をした後、キールは突き放すようにアマネに言った。

「ホラ、分かったらお前も地上で待機してるかなんかしろ」

「君はどうするんだい？」

「仕事に戻るに決まってるだろ」

○

同時刻――

アマネ達の頭上、晴れ渡る朝日の空を裂くように飛ぶ、黒いシルエットが2つ。国連軍の偵察機だ。

国連軍本部からの指令を受けて、『危険因子』と判断されたX-2シリーズの動向を徹底的に監視する。それが彼らに与えられた任務だが……。

「おいおい、森ばっかじゃねえかよ……」

地表を見渡しながら、シャルル・カルラは呆れたように呟いた。彼は国連空軍に所属する戦闘機のパイロットだ。弱冠22歳にして大尉まで上り詰めるその実力は確かなもので、実際に小部隊を任せられる程度には実績を上げている。

しかし、そんな彼でも所詮は人間。鷹の目を持っている訳ではない。

「これじゃあ、偵察も減ったくれもねえなあ……」

『はっは。まあそうゴネるなよ』

「でもツスねえ……」

海上空母からの上司との通信に応じながら、シャルルは偵察機を旋回させる。その軌道をなぞるように、部下の操縦するもう1機がその首を旋回させる。

シャルルは少しだけ高度を下げながら、通信に戻る。

「こんなところに住んでる娘さんとやらは、相当な物好きみたいツスね」

『まあ、そう不満を漏らすなよ。これはリーヴァ大佐からの直々の指令だ。達成すりゃあ、名も上がるさ』

上司の声はどこまでもおおらかだ。

——名も上がる、ね。

シャルルは呆れるように考えながら、とりあえず今後の事を考えよう、と思った。

「どうしましょうか？ このまま娘さん待ち続けるんスか？」

『ああ、できればそのまま様子を見ていてくれ。動きがあればすぐに伝えるんだ。いいな』

「了解ー」

通信を切断しながら、シャルルはもう一度眼下の森を見る。

「……いやあ、良い眺めだな」

そう、素人目にそう漏らしてしまうほどには、この森は壮麗な外観をしていた。

——いいねえ。

——もし嫁が出来たら、こういう場所に旅行に飛んできたいものだ。

——ま、ここだけは御免だけだな。敵さんの本拠地だって言うんだからな。

少しの夢想も、すぐに仕事に切り替える。シャルルとはそういう男だった。

「さて、しばらく暇だな」

どうしようか、と思いながら、何気なく通信を開くと――

ドガアアアアアアアアアン！！

「うをつ……！？」

突然、回線から聞こえてきた爆発音に、シャルルは思わず機体のバランスを崩しかける。

「な、何だ！？ 何があった！？」

必死に問いかけると――

『た、大変です！ えと……』

「第2空軍所属のシャルル・カルラ大尉だ！ 状況の説明を！」

相手は新人だろうか。対応はたどたどしいが、それでも必死に説明している。その背後から聞こえてくる悲鳴、爆発。

『げ、現在、謎の勢力から襲撃を受けています！』

「謎の勢力……？」

『て、敵機数は3。形状から軍部所属ではない事が確認済みです。そして――』

次の言葉に、シャルルは耳を疑った。

『その戦闘能力から――X―2シリーズ、と推測されま――』

次の瞬間。

ノイズ音とともに、通信は強制遮断された。

Sky 7-「Melancholy of summit in the

久々の更新です。すいません……。

このところ、体調を崩してしまして、早めに寝る事が多かったので更新出来ずにいました。

というわけで、長らく手つかずだったFBから更新です。

次は天日の更新ですので、お楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6951t/>

FB-フィフス・バタフライ-

2011年11月3日03時17分発行